

第2回 世界史のなかの遊廓 ——戦前の日本から見た欧米の公娼制度——

同志社大学人文科学研究so助教 林 葉子

1 海外でも広く関心を寄せられた日本の買売春問題

イメージと実態の乖離

前回、〈日本的なものとしての遊廓〉という捉え方は、それ自体、つくられたイメージではなかったかという問題提起をいたしました。そして、実態として公文書に記された統計の中にも信頼できないデータはあるということや、遊廓についての建前と実態とが乖離しており、その乖離や欺瞞的側面や嘘こそが近代公娼制度の特徴の一つでもあり、そのような性格を持つ制度であることが、近代公娼制度というものの理解を非常に難しくしているということをご説明しました。

日本の遊廓に対しては、すでに明治期にも、海外から広く関心が寄せられていましたが、海外で流布された日本の遊廓についての情報にも、実態とかなり乖離しているものがあります。

しかし、それがどんなに不正確な情報やイメージであっても、いったんそれが面白がられて広まってしまうと、あたかもそれが実態であるかのように影響力を持って、外交関係をも揺るがすような大問題に発展していきました。ただ単に日本国内に興味深い文化があるというような部分的な捉え方ではなくて、日本の遊廓や買売春問題が、日本そのものを代表的に示す事象として捉えら

れ、国際関係上の日本の位置づけに決定的な影響を与えるような一大事になっていったのです。

まずはそのことを、当時の史料から確認してみましょう。

前回、イギリスやフランスで用いられた吉原遊廓の絵葉書を紹介しましたが、明治期には、吉原に限らず、かなり多くの遊廓の絵葉書がヨーロッパで流通していたと推測されます。

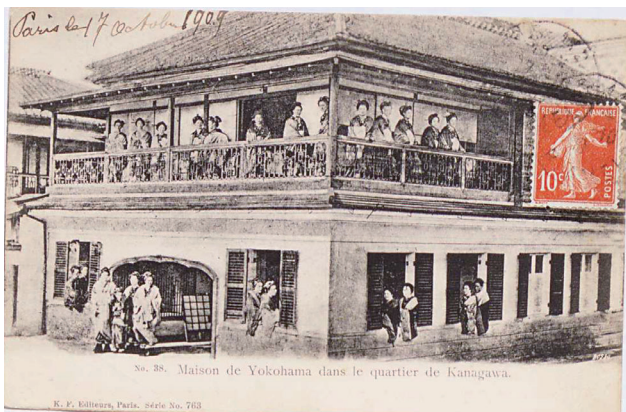
前回ご説明しましたとおり、娼婦であるとみなされた女性たちの情報は、懲罰的な意味合いで見世物的に扱われることがありました。そのため、歴史研究の中でも、彼女たちの名前や住所、顔写真のデータを出す際には注意が必要で、今回も、本人が本当に同意して撮影されたか怪しいものにつきましては、すでに広く流通してしまった絵葉書ではありますが、モザイクやぼかしを入れてお示しします。見づらい点はあるかと思いますが、どうか、その意図についてご理解ください。

【図 2-1】は、フランスのパリで発行され、パリで使用された横浜の遊廓の絵葉書です。

次に、【図 2-2】は、遊廓の張見世の様子です。これは日本で発行された絵葉書ですが、神戸の消印があり、フランスに送られたものです。

この張見世は、すでに明治末期には娼妓の人権に関わる社会問題として捉えられていましたが、海外の人々からは、張見世という仕掛けが、まるで動物園の檻のように感じられたようです。この張見世が動物園の檻よりも酷いのは、照明の使い方です。遊廓の営業は夜が中心ですので、張見世の娼妓が座っている内側を明

【図 2-1】 パリで発行され 1909 年にパリで使用された横浜の遊廓の絵葉書



【図 2-2】 日本で発行され 1909 年に神戸からフランスに郵送された張見世の写真の絵葉書



るくしますと、娼妓からは外の様子がよく分からず、外の人々からは娼妓らの姿がはっきりと見えます。

張見世を用いた視線の政治

そのような張見世の特徴について説明しますと、近代の権力に関心を持っておられる方々は、即座に、ミシェル・フーコーという思想家が論じたパノプティコンを想起されるかもしれません。パノプティコンというのは、刑務所の囚人を監視する施設の方式のことですが、監視する側は、光線の具合によって囚人の姿をよく見ることができる一方で、囚人の側は、その見ている視線を意識しながらも相手を見返すことはできないというものです。つまりそのように、何かを見るという行為には権力が絡んでいて、誰が誰を見るのかという構図は、社会的な力関係と紐づいています。

張見世の中の娼妓たちは、常に男性客から見られているということ意識しながらも、その客の姿は、光線の具合で、あまり見ることができませんでした。それは、動物園の檻の中の動物よりも、さらに一層、視線の権力に囚われた存在であったと言えます。

そして【図 2-2】の張見世の写真の絵葉書は、二重の意味で、視線の政治の道具となっています。張見世そのものは、ただのイメージではなく、娼妓たちの日常に実在しています。しかし彼女たちは、遊廓の敷地内だけでその姿を見られたのではなく、張見世の様子を写真に撮られ、それが絵葉書となって世界各地に送られることで、世界中の人々の視線に一方的にさらされるリスクをも負うことになりました。

外国人を買い手として意識した遊廓絵葉書の販売

日本に近代公娼制度があった時期に、遊廓に関する絵葉書の発行数がどれくらいあって、それがどの範囲に流通したかということ、現時点で把握するのは至難の技です。ただ、はっきりと言えますことは、日本で遊廓関連の絵葉書を販売していた人々は、外国人をその購買客として意識していたということです。

遊廓に限らず日本の観光地の写真を用いた絵葉書には英語のキャプションが付いているものが少なくありませんでした。前回ご紹介した日本で発行された吉原遊廓の絵葉書（【図 1-3】）にも、日本語の「東京名所 新吉原遊廓」という説明の隣に、“Yoshiwara Prostitute Quarter Tokyo” という英語の説明書きがありました。

さらに、今日お見せするこちらの絵葉書【図 2-3】【図 2-4】も同じく吉原遊廓をモチーフにしたものですが、これらには英語の説明書きしかありません。そしてその英文は、あまり英語が得意でない人が書いたものだったのではないかと考えられます。

【図 2-3】は、花魁道中を描いたものですが、““Yujos” of Yoshiwara taking their works.”と書いてあります。おそらく、仕事中の吉原の遊女、というような意味だと思われそうですが、英語の文法的には、間違いが見られます。

【図 2-4】は、遊廓内の娼妓と客の様子を描いたイラストです。そこには“1. Going home in the morning from Yoshiwara, 2. Guests making their toilettes and preparing to leave the house there.”と書かれてあります。一つ目は「朝、吉原から家に帰る」という意味だと思いますが、二つ目の文章の“make toilette”という表現は、

【図 2-3】 1907 年に日本で使用された英語の解説文付きの吉原の花魁道中の絵葉書



【図 2-4】 1907 年に日本で使用された英語の解説文付きの吉原遊廓内を描いた絵葉書



英語の辞書には載っていませんので、適当につくった造語ではないでしょうか。イラストから推測される意味としては、客が洗面所で身繕いをして娼家から出る準備をしているという意味だと思います。

このように、おそらくあまり英語が得意でない当時の日本人が、遊廓に興味を持っている外国人に絵葉書を売るために、イラストに英語の解説文をつけて売り出して、それが実際に買われて使われたのだと考えられます。そのような商売を思いつく人がいたということは、日本の遊廓や娼妓に対して関心を示す外国人が少なくなかったということの意味しています。

外国人が遊廓を理解する難しさ

しかし、日本で長く暮らしている人々の間でさえ、日本の遊廓がわかりづらく複雑な仕組みになっていたことは、前回、お話したとおりです。娼妓と芸妓は、明らかに違うものなのですが、「芸娼妓」とまとめて称されることもあったように、当時は、近い存在だと考えられていました。娼妓と芸妓は、それぞれに異なるルールのもとで管理されていましたが、当時の一般民衆のレベルでは、どちらも性を売っている娼婦だと認識されていました。

海外の人々にとって、日本の文化を知ろうとする時の最初の障壁は、日本語という言語でした。当時はまだ、日本語教育の方法や施設も確立していなかったため、たとえば日本に、キリスト教の宣教のために強い意志を持って来日した人々の間でも、日本語が難しすぎて、その習得は、まるで悪夢のようだと言われたほど

です。前回ご紹介した宣教師ユリシーズ・グラント・マーフィーのように日本語を使いこなせた外国人は珍しく、宣教師たちは、英語が話せる日本人からの情報に頼る傾向にありました。そのため、海外から来日して日本の娼妓運動に関わった人々の間でさえ、遊廓について、やや間違った情報が発信される場合があります。

ゲイシャへの関心の強さとステレオタイプ

そのような状況でしたから、日本国外の一般の人々の間では、日本の女性たちの姿は、着物っぽい衣装を来ていれば何でも安直にゲイシャとしてとらえられてしまうような風潮があり、遊廓の中の娼妓がいかにかしい生活を強いられているかといった実態についての知識はほとんど共有されないまま、その見かけの華々しさだけに注目が集まっていく傾向があったようです。

たとえば、【図2-5】は、イギリスで発行されたもので、ゲイシャに扮した女性たちの写真を用いた絵葉書ですが、それはまるで、“ゲイシャのコスプレパーティー”といった様相で、着物を来ている日本人女性の真似をして、他国の女性たちが面白がっている様子です。このようにゲイシャに扮した外国人の写真を用いた絵葉書は、かなり多くの種類が発行されていたということを私は確認しています。

こうした女性たちの衣装を見ると、たとえば【図2-5】でも、上の“GEISHA”と書かれたパネルがなければ、ただのワンピース姿の洋装ではないかと思われるほどに、いいかげんなキモノ姿です。この写真に写った女性たちが、日本の芸妓の実態に本当に関

【図2-5】 イギリスで発行された
ゲイシャに扮する女性たちの絵
葉書（未使用）



【図2-6】 フランス語圏で発行され
1906年にフランス国内で使用され
たゲイシャ風の絵葉書



心があったかどうかは怪しいです。【図2-6】はフランス語圏で発行されたものですが、片足を露わにしている、ゲイシャが性的な存在であると暗示するかのような姿です。

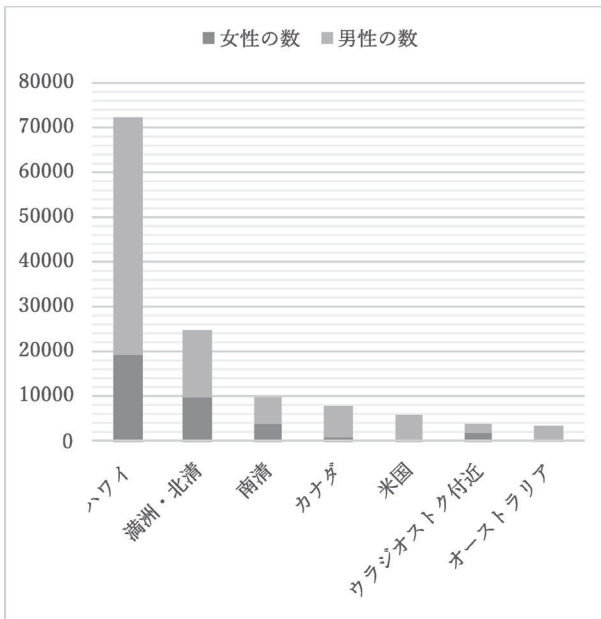
海外在住の日本人女性の数と買売春問題

しかし、そもそも、諸外国の人々が日本人女性の実態を知ろうとしても、当時は、直接に交流する機会が限られていました。【図2-7】のグラフは、1907年の時点の日本の外務省の調査報告に基

づき、救世軍がまとめた海外在住の日本人の総数とその男女比についてのデータをグラフ化したものです。特に日本人が多かった場所を選んで示したデータです。

圧倒的に日本人の数が多かったのは、ハワイでした。しかし、ハワイにいる日本人女性は結婚して家族で生活している人が多いと認識されていて、買売春問題との関連での社会問題化の焦点にはなりませんでした。

【図 2-7】 海外の日本人の総数と男女比（1907 年 11 月時点の外務省の調査報告によるデータ、「海外の日本婦人」『ときのこゑ』1908 年 7 月 1 日号より筆者作成）



買春問題との関連で特に問題化されたのは、その次の項目の「満州・北清」の日本人女性たちでした。この地域の日本人女性の数は、この時点で10,028人だと把握されていましたが、この女性たちのうち、かなりの割合の女性たちが「料理店勤務」と見なされていました。ここでいう「料理店」というのは、ただ料理を提供するだけの店ではなく、そこで雇われている女性たちの多くが性を売っていると考えられていました。

このグラフからわかりますように、海外に渡った日本人女性の数として多かったのは、ハワイの他では、中国大陸方面と北米です。現代の日本においては、映画化された山崎朋子さんの『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』（筑摩書房、1972年）という作品の影響もあってか〈東南アジアに渡った日本人娼婦〉という印象が強いようですが、実際には、満州が早くから特に注目されていました。また北米においては、特に西海岸での日本人排斥の動きと、日本人女性の売春との関係に注目が集まっていました。

海外に売られる日本人女性たち

そうして注目された海外在住の日本人女性たちのうち、人身売買目的で騙されて連れていかれた女性たちが多かったことやその具体的な様相も、当時の新聞等から確認できます。

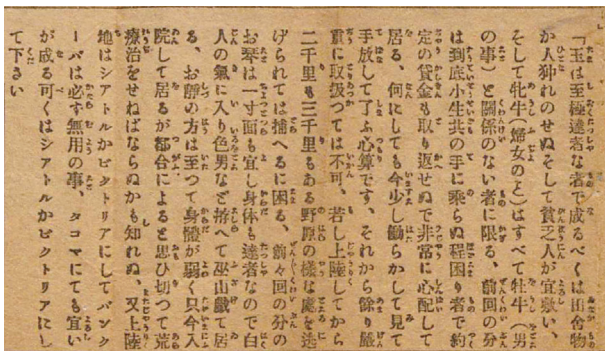
たとえば【図2-8】は、アメリカ合衆国の西海岸のシアトルへ日本人女性を売っていた人身売買業者が逮捕され、彼らが人身売買の取引のために書いた手紙の内容が、そのまま紹介されている新聞記事の一部です。

その手紙は次のように書き始められています。「玉は至極達者な者で、成るべくは田舎物か、人狎れのせぬ、そして貧乏人がよろしい」。ここでいう「玉」というのは娼妓や芸妓などを指す言葉です。

つまり、彼らが売りさばくために仕入れる女の子たちは、体が丈夫で、できるだけ辺鄙な田舎の出身で、あまり多くの人に接した経験を持っていなくて、貧乏な家の子が良い、と書いているのですね。

ここで、体が丈夫なのが良いという話はわかるとして、なぜ、人身売買をする人たちは、辺鄙な田舎の女の子を特に狙おうとしたのでしょうか？そしてなぜ、貧乏な家の女の子を主なターゲットにしたのでしょうか？皆さんの中には、もしかすると「性を売るのは客相手だから、都会で洗練された接客能力のある女の子の

【図 2-8】 米国・シアトルへの人身売買を仲介した女衞の手紙の紹介記事（『中京新報』1906年9月29日、同志社大学人文科学研究所所蔵）



方が良かったんじゃないか」とか「貧乏な家の子よりも、栄養をしっかりとって育った裕福な家の子の方が本当は良かったんじゃないか」と想像した方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、人身売買業者が求めたのは、そのような〈優れた労働者〉ではないのです。人身売買業者は、とにかく騙しやすく反抗しないタイプの女の子をターゲットにしました。つまりは、扱いやすければ誰でもよかったのです。田舎の貧しい家の子であれば、教育をほとんど受けさせてもらえないので人身売買業者の騙しの手口を知らないし、不当な扱いをされても抵抗の方法を学んでいないので、ただ単に、扱いやすかったわけです。

そして、そのようにして騙して連れてきた女の子たちのことを、彼らは手紙の中で「牝牛」と呼んでいます。女の子たちを人間扱いしていないことが、そのような表現からもわかります。そしてその「牝牛」は、できるだけ男性と関係を持った経験がない娘が良いと述べています。つまり、一般の〈労働者〉とは異なり、経験豊富であることは、マイナス評価でした。

この【図2-8】の記事で紹介された人身売買業者の手紙の中では、連れてきた中に反抗的な女の子がいるということに言及し、その子については「何にしても今少し働らかして見て手放して^{しま}了ふ心算です」と書いています。

そして、病気がちな「お静」という女の子については、いま入院しているが「都合によると思ひ切って荒療治をせねばならぬかも知れぬ」と書いています。その「荒療治」とは何のことでしょうか？おそらくそれは、治療をやめて見殺しにするか、こっそり

殺してしまうという意味だったと考えられます。

こうした手紙の内容からは、いかに人身売買業者が自分たちの儲けのことしか考えていなかったかということが、よくわかりません。

モーリス・グレゴリーによる海外の日本人娼婦についての報告

このような日本人女性の人身売買問題については、すでに1906年に国際会議でも報告されていました。それを報告したモーリス・グレゴリー (Maurice Gregory) という人物はイギリス人ですが、日本の近代公娼制度の問題を世界史のなかで捉える際に、彼が最も重要なキーパーソンであったと私は考えています。このグレゴリーというイギリスのキリスト教徒については、後で少し詳しく紹介します。

そのグレゴリーのレポートでは、日本人女性の人身売買が顕著に見られる場所として8項目が挙げられていました。最初に言及されているのは、やはり満州です。彼はイギリス人ですので、ロンドンタイムスの特派員から情報をもらったようです。2番目に挙げられているのは、フランス領インドシナです。彼は、サイゴンの現地の新聞からも情報を得ていて、特に、長崎から上海と香港を経由してサイゴンへ渡るルートがあると説明しています。その他、イギリス領のシンガポール、ビルマのラングーン、インドのカルカッタとボンベイ、オランダ領のバタビア、アメリカのカリフォルニアについて報告しています。

先ほど【図2-7】のグラフで見ていただいたとおり、実際に海

外に渡航していた日本人の数の多さという点では、東南アジアは目立っていませんでした。しかし、どの地域が問題化されるかということは、必ずしも実際の人数とは連動していません。グレゴリーの場合は、彼自身がインドのボンベイに3年ちかく滞在していて、イギリスの植民地問題に関心が強かったために、インドやシンガポールやビルマなどのイギリス領とその周辺領域の状況に、特に強い関心を持っていたと考えられます。

フランス領インドシナで発行された日本人女性の絵葉書

ところで、そのレポートの中で、満州の次に言及されているフランス領インドシナのサイゴンは、現在のベトナムのホーチミンですが、当時のサイゴンでは「日本人女性」の絵葉書が、たくさん出回っていたと考えられます。今でも、国内外の古書店やオークションで、ヴィンテージ絵葉書として流通しています。【図2-9】は、そのような絵葉書の中の一枚です。ここでは、顔にモザイクを入れてお示ししています。

この絵葉書の下部の説明書きには、そこに写った女の子たちは日本人であると明記されています。フランス語辞典には、*Horizontale* という名詞には、古語の場合「売春婦」という意味があると記されており、この絵葉書の女の子たちは、人身売買で同地へ売られた日本人である可能性があります。ただ、この絵葉書だけでは、彼女たちがどこの誰なのか、確かなことはわかりません。彼女たちの写真が同地で使われた経緯も、まだわかっていません。

【図2-9】 フランス領インドシナのサイゴンで発行され、
コーチシナからフランスのラ・ガレンヌ＝コロンプに郵送
された「日本人売春婦」の絵葉書



しかし、こうした絵葉書が発行されたという事態は、その「日本人売春婦」のイメージが、フランス領インドシナを起点として、フランスを中心に世界中に拡散されていった可能性があることを意味しています。絵葉書の实在、すなわちそのイメージの实在は、確かなことです。

当時このような絵葉書を用いた人々の意図は、もちろん、使う人によって異なっていたと考えられますが、着物姿の女の子の写真が同地で絵葉書に使われた例は多く、それは、ある種の性的な消費であったと考えられます。

次のこちらの【図2-10】も、やはりフランス領インドシナで発行された「トンキン（現在のハノイ）在住の日本人女性」の絵葉書です¹。この集合写真の絵葉書は、1910年にフランスに送られ

【図 2-10】 フランス領インドシナのトンキンで発行され、1910年にフランスに郵送された「トンキン在住日本人女性」の絵葉書



ました。

私は、いったん、このような「日本人女性」たちの写真の使われ方には、特に性的な意味がなかった可能性もあったのではないかと考えてみました。しかし、たとえば、【図 2-11】なども、着衣の着物姿の絵葉書ですが「日本人高級娼婦 (Demi Mondaine Japonaise)」と記されていますし、さらに【図 2-12】のような半裸の「日本人」女性の絵葉書が発行されたことも確認できました。

【図 2-12】には「サイゴンの日本人」だと記されていて、上側の写真の女性の名前も記されています。ほかしを入れたので見づらいかもかもしれませんが、片側の乳房があらわになっていて、長椅子のようなものに横たわっています。

このように半裸で横たわった姿などと併せて考えますと、明ら

【図 2-11】 フランス領インドシナで発行された「キャップ＝サン＝ジャック (Cap-St-Jacques) の日本人高級娼婦」の絵葉書 (未使用)



かに、フランス領インドシナで発行された「日本人女性」の絵葉書には、性的な意味があったといえます。後ほど、比較のために別の絵葉書を見ていただきますので、【図 2-12】の写真の女性のポーズを、少し覚えておいてください。

〈性的な日本人女性〉のイメージの世界的拡散

たとえ、海外在住の「日本人娼婦」の数が実際にはあまり多くなくても、こうした〈性的な日本人

【図 2-12】 フランス領インドシナで発行された「サイゴンの日本人」の絵葉書 (未使用)



女性〉というイメージが、絵葉書などのメディアを通じて広く世界に拡散されていきました。海外に人身売買で連れていかれて娼婦にされた日本人女性は確かに実在したのですが、それだけに止まらず、「日本人娼婦」というタイトルを付けた写真の絵葉書がフランス領インドシナや英領マラヤなどで販売され、それらの帝国の本国に送られるだけでなく、植民地間で郵送したり他の国々に郵送したりすることができるようになっていました。そのような現象は日本とフランス領インドシナ等との間の人の移動という問題を超えて、〈性的な日本人女性〉のイメージの世界的拡散という新たな問題を生み出していました。

そして、そのように拡散した〈性的な日本人女性〉というイメージに対しては、ただ単に「人身売買という社会問題が日本の一部に見られる」というような、日本の部分的な問題という理解ではなくて、やがて、日本という国そのものがゲイシャという表象に覆われていきます。それは、イメージだけの問題にとどまらず、本当の戦争の呼び水になっていきました。

2 日本はゲイシャの国？

——海外における日本人女性の差別的表象と〈文明／野蛮〉のイメージの戦争

ゲイシャとして描かれる日本国

【図 2-13】は、フランスのパリで発行され、イギリスのウィズビーチという街に送られた軍事郵便の絵葉書です。これは、消印

から、1918年に使用されたことがわかっています。下にはJapan（日本）と書いてあって、着物姿の女性が蝶として描かれています。蝶の羽には、日本の国旗の模様が描かれています。

現在でも、蝶というモチーフが性的なニュアンスのある仕事についている女性たちの暗喩として用いられることがあるのを、皆さんもご存知かと思います。注目していただきたいのは、この蝶の触覚の部分がかんざしが簪またはこうがい筧と呼ばれる娼妓の髪飾りと重ね合わされている点です。

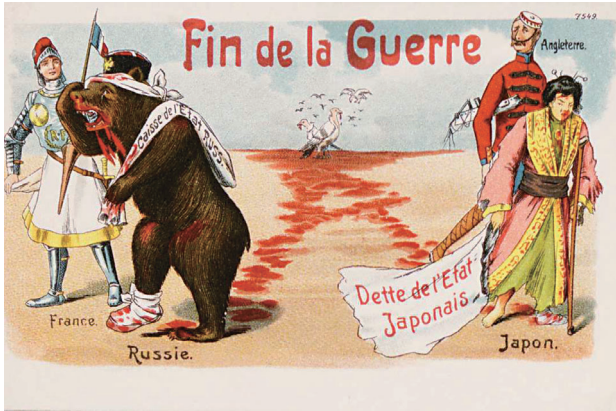
次の【図 2-14】と【図 2-15】は、少し遡って1904年から1905年にかけての日露戦争を風刺した絵葉書です。フランス語圏で発行され、日本の姿はゲイシャとして、ロシアは熊として描かれています。

【図 2-13】 フランスのパリで発行され 1918 年にイギリスのウィズビーチに送られた軍事郵便



今の日本人から見れば、このイラストの中の日本を表現した女性の衣装は、あまり本物の着物らしくは見えません。しかし、そのイラストは、さきほどのゲイシャのコスプレ写真（【図 2-5】 【図 2-6】）の衣装にも似ていて、日本の着物がこん

【図 2-14】【図 2-15】 日本国をゲイシャに擬人化した日露戦争の風刺絵葉書（フランス語圏で発行、未使用）



なふうにイメージされることがあったのだとわかります。やはりこのゲイシャのイラスト（【図 2-14】【図 2-15】）でも、頭の上に、まるで触覚のような、ぴょんと飛び出た先の丸い髪飾りが描かれ

ています。

【図 2-16】は、ロンドンで使用されたものです。このイラストの下部に描かれた横たわる男性は当時のロシアの海軍の旗を持っていますので、やはり日露戦争の風刺画であり、日本国が着物姿のゲイシャとして描かれているのだと考えられます。

日露戦争における日本の勝利は、アジアの小国がロシアという広大な領土を持つ国を負かしたということで、たいへん注目されました。しかし、その勝利が描かれる時に、このようにゲイシャ姿で描かれるというのは、決して中立的な表現ではなくて、「た

【図 2-16】日本国をゲイシャに擬人化した日露戦争の風刺絵葉書（ロンドンで使用）



かがゲイシャの国」というニュアンスで黄色人種の国である日本を貶めようという意図がそこにあったと考えられます。

国を女性の姿にたとえる意味

そもそも、この時代は女性差別が根強く、特に娼婦とみなされた女性たちへの差別感情は強烈なものでした。そのような時代背景もあって、弱い側とみなした国を女性として表現するこ

とは、貶めの手法として、しばしば使われました。

日本人の中にも、そのようなジェンダー表象の政治に薄々気づいていた人は、少なくなかったと考えられます。なぜなら、日本で発行された絵葉書では、自分たちの国である日本国そのものをゲイシャに擬人化したような表現はほとんど用いられず、日本国を人の姿にたとえる時には、屈強な男性として描くものが多かったからです。

たとえば【図 2-17】をご覧ください。この絵葉書の説明書きには「日韓全盟」（日韓同盟）と書かれていますが、それは1910年の韓国併合のことだと考えられます。「韓国併合」と表現すれば、併合したのは日本ですので、日本の侵略であるということが、はっきりと言葉に表れます。それに対して「同盟」と言うならば、あたかもそれが韓国側の同意のもとに行われたかのような表現になり、侵略の事実が曖昧にされます。それでこの日本の絵葉書は「日韓全盟」と書いて、自分たちの侵略の暴力性を誤魔化そうとしているわけなの

【図 2-17】日本で発行された「日韓全盟」（韓国併合）の絵葉書（未使用）



ですが、その本音は、イラストの方には明示されています。日本国は、帽子に「日本」と記された軍人の姿になっていて、韓国は、衣服にカタカナで「カンコク」と記された女性の姿として表現されています。日本の発行物で国際関係を擬人化して描く時には、このように、自分たちは男性の姿であり、植民地化の対象とみなした側を、女性として描いているのです。

ですから、この当時、日本という国がヨーロッパでゲイシャに擬人化されていることについても、当時の国際事情に通じた日本人であれば、それが国際政治上、いかに不穏な事態であるかということは理解されていたはずです。

ゲイシャ＝〈誘惑され、占領される存在〉へ

興味深いことに、そのゲイシャというイメージは、日本国のイメージを超えて、〈誘惑され、占領される存在〉を象徴するものと受け止められるようになっていました。たとえば【図 2-18】は、6枚組の絵葉書の中の4枚なのですが、6コマ漫画のようになっています。これも、日露戦争の頃の国際関係を風刺したシリーズものの絵葉書なのですが、ここではロシアのことを **Russland** と書いていますので、ドイツかドイツ語圏の国で発行されたものとわかります。日本と中国を表した男性の顔は黄色く塗られていて、そのような描き方からも、これが決してアジア人によって発行されたものではないことがわかります。

おそらくこのイラストを描いた人は、韓国と日本の文化的な違いについて、ほとんど関心がなかったのだと思います。なぜなら、

【図 2-18】ドイツ語圏で発行された日露戦争前後のアジア情勢を風刺する絵葉書（未使用）



Korea（韓国）を擬人化した女性のイラストは、なぜか日本の着物をまとう姿として描かれているからです。そしてその女性が、日本と中国とロシアをそれぞれに擬人化した男性たちに誘惑され、男性たちがこの女性をとりあつて喧嘩するという構図になっています。

この一連の絵葉書においては、ゲイシャのイメージは、もはや日本という国とは関係なく、単に〈誘惑され占領される存在〉の比喩となっていたことがわかります。

そのようにゲイシャのイメージは、人々を魅了する側面がある反面、淫乱な存在、つまりは〈野蛮〉の比喩として、外交上の攻撃材料として用いられることがありました。そして〈性的な逸脱

者が多く住まう野蛮な国」というイメージは、たとえそれが実態と乖離していても、〈文明〉化のための戦争という軍事占領の正当化の理由になっていきました。つまり、人身売買問題の心理的温床としての近代公娼制度を維持しているということは、当時、外交上のリスクでもあると捉えられるようになっていったわけです。

日本人に対する差別感情の高まりへの懸念

日本で廃娼運動に加わった人々の中には、国際事情に詳しく、そのようなリスクに早くから気づいていた人が少なくありませんでした。廃娼運動とキリスト教との結びつきの強さは、もちろん、キリスト教の教えそのものと関係がありますが、それだけではなく、当時のキリスト教徒には、国際事情に強い関心を持つ知的エリートも多かったという事情が関係しています。宣教師は欧米から来ますし、自分が所属する教会のルーツが欧米にある場合が多く、キリスト教の信仰を持つことが、欧米諸国の政治や文化への関心の強さにも結びついていきました。イギリスやアメリカに直接渡って現地のキリスト教徒と交流を持つ人々も現れました。

そしてそのような人々が、日本国内で、自分たちの廃娼運動に引きつけて、日本のイメージが海外でいかに悪化しているか、そのイメージの悪化が、日本の公娼制度や人身売買といかに深い関係があるかということを説明し、当時の日本人の愛国心に訴えかけて、日本とそのイメージを守るためには公娼制度は廃止すべきだと訴えかけたわけです。

こうした訴えについては、廃娼運動に参加した人々は国家の体面ばかり気にしていたという批判があり、そのような側面は確かにあったと私も考えていますが、同時に、〈ゲイシャの国＝売春の国＝日本〉というイメージが、日本人に対する差別と苛烈な日本人排斥へ結びついていったことも、歴史的事実です。すでに20世紀初頭には、北米において、黄禍論と結びついた排日の動きが見られ、それはやがて、太平洋戦争下の日本人の強制収容へと帰結しました。そのような背景もあって、日本の廃娼運動に参加した人々の中には、在米の日本人活動家もいました。

差別や排除の暴力といかに対峙するか

ここでいったん、少し歴史から離れて、差別や排除の暴力に直面した時に、それが人間関係であれ国際関係であれ、どのような対応をするのが正解なのかということを考えてみたいと思います。

だいたい被害者側の対応のパターンは、以下の①から③の3つに分類できるのではないのでしょうか。そして、20世紀初頭以降の日本における廃娼運動の動きは、次の②の方向性だったと考えられます。

- ①差別や排除の暴力そのものを、批判する（または批判的に捉える）
- ②差別されたり排除されたりした自分の側に何らかの原因があったと考え、その原因を自ら除こうとする

- ③差別や排除の暴力の矛先を自分よりも弱い他者に向け、時には自らも暴力をふるう者となり、自分だけが被害を回避しようとする（抑圧移譲）

この3つのパターンを今回の歴史の話に当てはめてみた場合、②のパターンだと、「日本が〈ゲイシャの国〉として低く扱われるのは、実際に日本国内には公娼制度があるし、海外でも日本人の人身売買が行われているからなので、その日本の問題を無くしさえすれば、欧米諸国に馬鹿にされることもなくなって、きっと欧米並みの「一等国」として正当に扱われるようになるだろう」といった発想になります。

しかし現在、差別や排除の暴力に関する研究においては、①が正解であるとされています。被害者側に「原因」はなく、すべて加害者の「問題」であるというのが、基本的な考え方です。差別したり排除したりする人たちは、相手がどんなに優れていても差別するし、排除するし、暴力をふるいます。そうやって暴力をふるう加害者は、何かと自分の暴力に理由を付けて、自分の暴力行為を被害者のせいにしようとしますが、それは加害者側の言い訳に過ぎません。

差別されたり排除されたりした時の、被害者側の対応の正解は①です。被害者側は、決して「差別され、排除されたのは、きっと自分に何か原因があるから、それを直さなくてはならない」などと考える必要はないし、たとえ実際に「直す」ことができたとしても、残念ながら何も根本的な問題状況は変わらないでしょう。

なぜなら、それはすべて加害者側が抱えている問題から生じていることなので、被害者がどんなに努力しようと関係がないからです。

戦前の廃娼運動の問題は、①ではなく②の姿勢をとったことにあります。自分たちが差別される原因となっていると考えた〈娼婦的な日本人女性たち〉を、結果的に排除しようとしたことにあります。①のスタンスをとるならば、いじめというよりは“いじり”に近いゲイシャネタの侮辱に対して、「なぜ、日本人女性の姿に「日本人娼婦」とタイトルを付けて絵葉書にして世界中に晒したりするのか」「なぜ、日本国を奇妙なゲイシャ姿にたとえて侮辱するのか」と問い、「それは日本人女性への差別であり娼婦差別でもある」と、ただ正面から批判すればよかったです。今の時点で考えれば、そのように思えます。

ただ、②のスタンスをとった廃娼運動は、実在する近代公娼制度と深刻な人身売買の問題を解決しようとしたことにより、真つ当な社会運動としても展開していきました。近代公娼制度の下で女性たちが実質的に性奴隷化されていたことも、海外での日本人女性の人身売買問題も、欧米からの視線がどのようであるかということとは関係なく、必ず解決されるべき日本の社会問題でした。

そして、最も悪い対応は、上記の③であることを、ここではっきり確認しておきたいと思います。③とは、すなわち、暴力の矛先を自分よりも弱いと見なした他者に向けてることによって、自分だけがその苦境から抜け出そうとする動きです。それは、たとえば、元々いじめられっ子だった人が、次のターゲットを見つけて、

やがて自らいじめの尖兵になっていくような、抑圧移譲の動きです。そしてそのような③の動きは、廃娼運動とは対立関係にある存娼派の人々がとった姿勢でした。

存娼派の日本のメディアによるアジア諸国への抑圧移譲

歴史上の③の具体例として、【図 2-19】をご覧ください。これは、『風俗画報』という広く読まれた雑誌の、日露戦争の勝利を祝った特集号に掲載されたイラストです。タイトルとして「満州の公娼（奉天）」と記されています。

このイラストで中央に描かれているのは日本の兵士たちです。彼ら兵士を誘うかのように、現地の男性が、現地の女の子を指さして「この娘、どうですか？」といった感じで指差しているという構図です。このように日露戦争関連の冊子に、なぜか唐突に「奉天の公娼」が紹介されています。

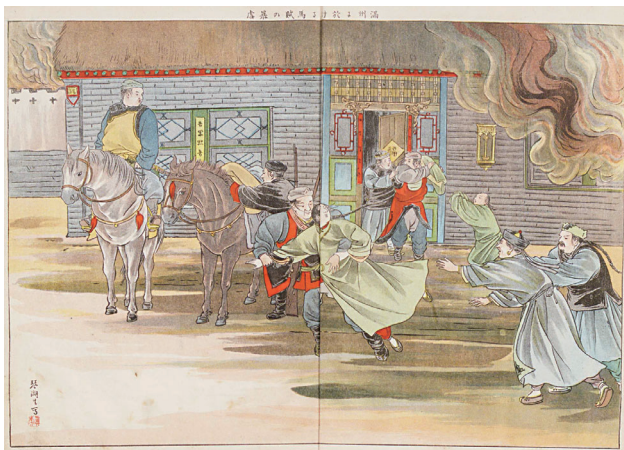
このイラストには「奉天の公娼」を買おうと物色している日本の兵士を批判するニュアンスは全く無く、むしろ日本の男性たちに「奉天に行けば、こんなにかわいい女の子たちを買うことができますよ」と誘いかけているかのようです。これは日本のメディアに掲載されたイラストであり、日本側にだけ都合の良いイメージを奉天の人々に押し付けているのですが、当時、このようなイラストを見た男性読者の中には、勘違いして、いつか自分が奉天に行く時にも現地の男女がこぞって自分の買春を歓迎してくれるのではないかと妄想した人だっていたのではないのでしょうか。恐ろしいことです。

【図 2-19】「満州の公娼（奉天）」
（『風俗画報』増刊第 333 号、1906
年 1 月 25 日）



次に、やはり同じシリーズの冊子に掲載された【図 2-20】ですが、このイラストには、「満州における馬賊の暴虐」というタイトルがつけられています。このイラストの中央には、一人の女性が、現地の「馬賊」の男性たちに略奪されて連れ去られるという構図です。その後ろでは、やはり「馬賊」が食物を奪い、家を焼き払っています。このようなイラストを描いた意図は、満州の人々を淫乱で〈野蛮〉な存在として描き出そうということだったと考えられます。

【図 2-20】「満州における馬賊の暴虐」（前掲『風俗画報』増刊第 333 号）



トランスジェンダーの排除

次の【図 2-21】も、同じく〈野蛮な満州〉というイメージを打ち出すものです。これらの写真にも「奉天の公娼」というタイトルが付けられています。特に注目したいのは、右上の「男装の公娼」というタイトルがついた写真です。ここでは「男装」と書かれています。このような服装が、何を根拠に「男装」と見なされたのか、よくわかりません。しかしその真偽はともかくも、「男装」とタイトルを付け、トランスジェンダーであると強調したことは、この時代に「変態」という言葉を用いて揶揄されたような性的逸脱^{しるし}の徴を付け、「奉天の公娼」の〈野蛮〉性を表現しよう

【図 2-21】「男装の公娼」（右上、前掲『風俗画報』増刊第 333 号）



としたのだろうと考えられます。

これらの満州の性の表象は、日本人が、自分たちのアジア諸国への侵略行為や自国の公娼制度の問題を棚に上げ、性的な〈野蛮〉さに対する非難の矛先を、自国から満州へ向けようとする動きだったと捉えることができます。

「満洲の藝妓」の表象

さきほど、サイゴンの日本人のセミヌード写真（【図 2-12】）について、この女性のポーズを少し覚えておいてくださいとお願いしていましたけれども、それと同じような姿勢で写る「満洲の藝妓」の絵葉書が、日本で発行されていました（【図 2-22】【図 2-23】）。

【図 2-22】東京・神田で発行された「(支那風俗) 満洲の藝妓」の絵葉書 (未使用)



【図 2-23】日本で発行された「紅燈の艶姿 (満洲國・民衆風俗)」の絵葉書 (未使用)



【図 2-22】では、「満洲の藝妓」という日本語の説明とともに、英語で“Singing-girl of Manchuria”と記されているのですが、このような姿で撮影された女性が、ただの「歌手」として見られただけではなかったであろうことは、同じ姿勢の女性の写真を用いた【図 2-23】の絵葉書の「紅燈の艶姿」という説明書きから推測できます。「紅燈」とは、今でも性風俗店街を

英語で Red-light District といいますが、その言葉には、性
を売る場所というニュアンスがあります。

両方とも未使用の絵葉書なので発行時期は特定しづらいです
が、【図 2-23】には「満洲國・民衆風俗」と表記されているので、
1932 年以降に発行されたものだと考えられます。つまり、フラン
ス領インドシナで同じ構図の日本人女性の絵葉書が盛んに出回っ
ていた時期よりも、後になります。

これらの写真にも顔にモザイクをかけましたが、かつては自国
の日本の女性たちに対して海外で行われてしまった性的消費を、
このように、今度は日本人が占領した場所で、現地の女性たち
に対して同じようなことを行ったというのは、まさに抑圧移譲の振
る舞いであったと言えるのではないのでしょうか。

3 日本の廃娼運動の国際的展開

国際化のきっかけ

ここまでにご紹介しましたような、娼婦のイメージを用いた暴
力の連鎖が、欧米から日本へ、日本から他のアジア諸国へと、
次々に生み出されてしまっている状況のもとで、廃娼運動は、国
際的に展開されていくことになりました。

その方向性と考え方には、差別や排除への対抗という点では、
さきほど申しましたような時代的な限界がありました。女性差
別の現れである奴隷制的な近代公娼制度の廃止は、当時の日本社
会において、何をおいても必要なことでした。

また、さきほど、「見る」という行為が近代の権力と結びついているということをフーコーと絡めて言及しましたが、日本において、欧米諸国における買売春や公娼制度について調査・研究する動きは、それまで一方的に見られて批判されるばかりであった日本が、自らも相手を見つめ返すという意味があったと考えられます。それは、単に欧米諸国をモデルとして賞賛するばかりではなく、欧米との比較において日本の位置を客観視すると同時に、欧米諸国の問題についても把握して、最終的に自分たちの国を良くしようとする動きでした。

日本の廃娼運動が国際的な廃娼運動と直接的につながる最初のきっかけを作り出したのは、婦人矯風会や救世軍であったと考えられます。ただ、婦人矯風会は、その母体となった、**Woman's Christian Temperance Union** という団体が、その名のとおり、**Temperance** すなわち「禁酒」運動に最も力を入れていて、最初の頃の国際的交流は、主に、禁酒に関することだったといえます。

他方、救世軍は、キリスト教のプロテスタントの一派なのですが、社会的弱者の救済に最も力を入れていました。人身売買問題の解決を目指して娼妓や芸妓の自由廃業を支援して、性的な問題を抱えて困っている女性たちを助ける救済所を作り、数多くの女性たちを助けました。そのような救世軍の活動は現在も続いており、今でも、救世軍によって婦人保護施設が運営されています。なお、婦人保護施設の運営には、矯風会も早くから取り組み、現在も慈愛寮などで女性支援の活動が行われています。

救世軍は、娼妓救済の他にも、監獄から出獄した人々の社会復

婦を助ける出獄人救済事業に取り組み、病院の経営なども行なっています。その他、貧困や災害によって困窮する人を助ける活動に、広く携わりました。

山室軍平と救世軍

その救世軍は、イギリスから日本へ伝わりましたが、日本で救世軍のリーダーになったのが、山室軍平という人物です。彼は若いころに同志社で学び、新島襄からも強い影響を受けました。その山室軍平と妻の山室機恵子が中心となって東京に設立した「婦人救済所」は、廃娼運動の歴史の中でも、最も重要な成果の一つであったといえます。その救済所は、娼妓や芸妓を廃業したり暴力的な親や職場から逃げたりして、行き場をなくした女性たちに、仮の住まいを提供し、職業訓練をしました。

山室軍平とその妻の山室機恵子は、そのような女性たちの救済活動にあまりに熱心に取り組んでいたために、自分の子どもたちの世話に手が行き届かず、ついに、幼い子どもの一人を病気で亡くしてしまいました。山室機恵子自身も、かなり若い時に亡くなってしまうましたが、彼らはまさに命懸けで、娼妓の救済に取り組んでいたといえます。

山室軍平は、その自分の子どもが亡くなる時に、まだ赤ん坊であるその子が、自分の苦しみを一言も訴えることができずに亡くなっていく姿と、娼妓たちの姿とを重ね合わせ、廃娼運動に自分の生涯を賭けることを決意します。その時のことを彼は、『公娼全廃論』という本の中で、次のように書き記しています。

「世には此^{ひんし}瀕死の赤坊と同じ様に、其身に堪へ難き苦痛を受けつゝ、唯一言も之を訴ふることを得せず、刻々死地に向ふて急ぐ同胞が、自分の身の邊に、数多くあるのではあるまひか。若し然うであるならば、神よ助け給へ。私は終生此瀕死の赤坊の脈を握った時の心持を忘れず、世の告ぐる所なき同胞の為に力を盡^{つく}さねばならぬ」と。而して思ふに今彼公娼の悪制度の為に遊廓の中に囚へられ、其身を一生他人の^{なぶり}虜物となして、悲しくもまた浅ましき世渡をして居る彼の娼妓の如きは、正しく此堪難き苦痛を身に受けながら、告ぐる所なき同胞の尤もなるものではあるまひか。^{たて}起よ、博愛義侠の人、起つて此不憫なる多数の同胞姉妹を、此奇怪至極なる奴隷の境涯より解放せん為めに力を盡せ。(山室軍平『公娼全廢論』 警醒社、1911年、12-13頁)

このような強い決意をもって、山室軍平らが、自分の生活の全てをかけ、時には家族の命を失いながらも取り組んだ社会運動は、イギリスでも高く評価されることになりました。

海外で報じられる日本の廃娼運動

【図 2-24】は、救世軍がイギリスのロンドンで発行していた機関紙の *The War Cry* の 1907 年 4 月号の表紙です。これは、The Salvation Army International Heritage Centre (救世軍国際遺産センター、ロンドン) で撮影し、研究上の使用許可を得てここに掲

載しています。この表紙には、タイトルとして“Land of the Cherry Blossom”（「桜の国」）と書かれてあります。それは日本のことを意味しています。その表紙の中央の集合写真には、Girls and Officers of the Rescue Home Tokyo と記されています。この“the Rescue Home Tokyo”というのが、さきほど申しました「婦人救済所」のことです。もともとは、娼妓や芸妓や酌婦であった女の子たちと、その救済所のスタッフの写真です。

この表紙の画像で重要なことは、かつて娼婦的存在と見なされた女性たちの集合写真が、中心に配置されているということです。画面のどこに何が配置されているかということは、それを配置した人々の価値観を表しています。一般に、大切なものは中心に置きます。この時代には、男性や社会的地位の高い人を中心に置くことが多く、娼婦と見なされた女性たちは隅に追いやられる傾向にありました。しかし、ここでは男性のスタッフの写真よりも上に、彼女たちの写真が配置されています。このような示し方からわかるのは、救世軍が、当時としては、かなり男女平等が進んで

【図 2-24】 *The War Cry* の表紙 (1907 年 4 月 20 日 号、The Salvation Army International Heritage Centre 所蔵)



いた団体だったということです。そして、このような表紙だけでなく、その本文においても、日本での活動の様子が詳しく紹介されました。この *The War Cry* の他に、*All the World* という国際的な広報誌があって、そこでも日本の廃娼運動は紹介され、それはイギリスだけでなく、救世軍の世界各国の拠点に配布されていたと考えられます。

吉原遊廓の大火と世界につながる廃娼運動

すでにそのように日本の廃娼運動の情報は国際的に広まりつつありましたが、日本とヨーロッパ中心の国際的な廃娼運動との連携を一気に強めたのが、前回も少し紹介しました1911年4月の吉原の大火です。

その火事は、日本国内だけでなく、海外にも即座に伝えられました。*The Japan Times* という英文の新聞では、かなり詳しく報じられました。その報道に接して、*The Japan Times* の読者は、日本の近代公娼制度が奴隷制であったという認識を新たにしました。そしてその奴隷制の象徴であると見られていたヨシワラが全焼したというニュースに接して、かねてから日本の公娼制度の問題に関心を持っていた人々に、今こそそれを無くして娼妓たちを救済すべきだという思いを抱かせました。

そこで日本に使者を派遣することになったのが、*The International Federation for the Abolition of the State Regulation of Vice* という団体です。これは、「万国廃娼同盟会」と当時から訳されています。1875年に発足し、スイスのジュネーブに本部を置

いていました。最初の名誉会頭となったのが、イギリスの廃娼運動の闘士として知られるジョセフィン・バトラーという女性です。

関連団体が、イギリス、アメリカ合衆国、ベルギー、デンマーク、オランダ、フランス、スウェーデン、インド、イタリア、ロシアなどにあって、日本がその支部となった頃には、それらの定期行物が9ヶ国語で刊行されていました。

当時の日本の廃娼運動団体では、フランス語やドイツ語は使えなくても、英語ならば使えるという人がいましたので、万国廃娼同盟会から使者を派遣することが打診された時に、派遣するのは英語の話者にしてほしいと日本側の要望を伝えました。

モーリス・グレゴリーの来日

そこで派遣されたのが、イギリス人のモーリス・グレゴリーです。さきほど紹介した、1906年の国際会議で海外の日本人娼婦についてレポートした人物です。

彼が実際に来日したのは1911年のことですが、私は、それより22年も前の1889年に、グレゴリーが日本政府に公娼廃止を訴えた記事を、インドのボンベイで彼らが刊行していた *The Banner of Asia* (『アジアの旗』) という雑誌の中で見つけました。

この *The Banner of Asia* という雑誌は、現在では、イギリスのLSE (London School of Economics) の The Women's Library (女性図書館) というところに所蔵されていて、今のところ、世界中でその一点だけ、所蔵が確認されています。そして私も、その史料を、The Women's Library で閲覧しました。

私は、モーリス・グレゴリーが日本の廃娼運動と世界とを繋いだキーパーソンであるということに気づいて、6、7年前からロンドンとアムステルダムで少しずつ彼に関連する史料を集めていたのですけれども、この *The Banner of Asia* の記事を見つけた時には、驚くと同時に、たいへん感銘を受けました。なぜかといいますと、グレゴリーが日本に来た理由は、イギリス人である彼が、日本に近代公娼制度を導入したのが他ならぬイギリス人であったと知って責任を感じて、それを「イギリスの罪」であると捉えて、その「罪」をあがなうために、日本の廃娼のために尽くすことになったのだと知ったからです。

グレゴリー自身は、直接的には、イギリスによる日本への公娼制度導入には全く関与していません。にもかかわらず、帝国としてのイギリスが、その植民地や日本で引き起こした問題について、イギリス出身の自分自身の責任でもあると重く捉えて、彼は自分の人生をかけて、それらの問題を解決するための社会運動に取り組んだのでした。翻って自分自身のことを考えてみますと、現在でも日本は、戦前にアジア諸国で引き起こした日本軍「慰安婦」問題などを含む様々な問題の責任を問われているわけですが、それらを「日本の罪」ととらえて、どれくらいそれを我が事として受けとめて自分の行動を変えていけるのだろうかと考えてみますと、その課題がいかに重く難しいかということに、あらためて気づかされます。しかし、グレゴリーは実際に、そうした重い課題に果敢に取り組んだ人でした。

彼は、熱心なキリスト教徒で、教派としては、クエーカーでし

た。クエーカーは、日本でも平和運動に関わった人が多いのですが、グレゴリーは、帝国としてのイギリスが世界各地で様々に引き起こしている社会問題に、キリスト教国であるイギリスのキリスト教徒として責任を感じて、人身売買問題だけでなく、アヘン商取引の廃絶を求める運動などにも取り組んでいました。彼は生涯にわたって、そのような社会運動に取り組みました。

彼は、1911年から1912年にかけて日本に来たのですが、日本だけでなくその前後に、モスクワ、上海、香港、フィリピン、ビスマルク諸島、ニューギニア、オーストラリア、セイロン島に立ち寄っています。日本での滞在は約5ヶ月で、その次に長いのがオーストラリアでの滞在で、約3ヶ月半でした。なぜそんなに長い間、彼がオーストラリアにいたのか、最初はよくわからなかったのですが、調べてみますと、当時のオーストラリアでは、日本がオーストラリアに戦争を仕掛けてくるのではないかと恐れている人々がいて、そのようなオーストラリアの人々に対して、グレゴリーは、日本はそのような危険な国ではないと説得をしていたということがわかってきました。当時の新聞では、グレゴリーが、オーストラリアにおける黄禍論（“yellow peril”）の言説に抗っているのだと報じられています。つまり、そのことからわかるのは、グレゴリーの来日は、ただ単に日本の公娼制度を廃止させようという意図からだけではなくて、根拠があつたりなかつたりする日本の悪いイメージを払拭して、日本を救い出そうという意図があつたのだと考えられます。

油谷治郎七による海外事情の紹介

グレゴリーが来日するにあたって、彼が最初に対面して相談した日本人は、油谷治郎七あぶらだにじろうひち（次郎七）という人でした【図 2-25】。イギリスを出発する前のグレゴリーが、ロンドンで、日本でどのように娼妓運動を進めたらいいかと考えている頃、ちょうど油谷はロンドンに滞在していました。

この時からグレゴリーが亡くなる 1932 年 10 月まで、彼らの交流は 20 年以上にわたって続きました。日本人の中では、油谷治郎七と山室軍平の二人が、グレゴリーと最も親しくなった人だったと考えられます。

油谷治郎七は、著名な山室軍平とは異なり、現在では、ほとんど知られていない人物です。しかし、欧米の公娼制度についての情報の、かなりの部分が、彼によって日本にもたらされました。油谷治郎七は、同志社神学校で学んだ後、日本組合基督教会の京都四条教会で牧師として活動しました。彼は早くに母親を亡くし、かなり苦学した人のようです。1902 年 9 月からは、

【図 2-25】油谷治郎七（友愛会教育部長の頃、坂本正雄編『友愛会創立五週年史』^{〔ママ〕}（友愛会、1917 年）、友愛労働歴史館所蔵）



ニューヨークのユニオン神学校やコロンビア大学で学び、その10年以上にわたる海外生活の経験から、海外での情報収集の力をつけ、後には外務省の囑託として海外の情報を集める仕事をしていました。

油谷治郎七は1913年に帰国するとまもなく、設立2年目だった廓清会で活動を始めて、日本で海外の情報を発信し続けました。その情報源は、グレゴリーから得たものも少なくなかったと考えられます。

彼の関心領域がいかに広がったかということは、彼が書いた記事の中で、どれくらいの国や都市に言及しているかということからもわかります。1913年から1914年にかけての時期だけでも、中国、インド、シンガポール、ベルギー、ロシア、アメリカ（シアトル、サンフランシスコ、シカゴ、ワシントンDC、ボルチモア、ニューヨーク）、カナダ（バンクーバー）、日本、オーストリア（ウィーン）、ドイツ（ブレーメン、ハンブルク、マンハイム、フランクフルト、ベルリン）、ベルギー（ブリュッセル）、フランス、イギリス、ノルウェー、デンマークについて言及して情報発信をしています。その内容は主に、これらの国や都市における公娼制度に関連する法とその廃止の状況、廃娼運動に関わる団体や個人の情報、公娼制度や廃娼運動に関する本の紹介、また、廃娼や性病対策に関する国際会議の開催状況、そして婦人救済所についてでした。

廓清会婦人矯風会廃娼聯盟

油谷治郎七の個人的な言論活動以外では、団体として、廓清会婦人矯風会廃娼聯盟がその教育活動の一環として、主にヨーロッパの公娼制度とその廃止の実態について伝える出版活動を行いました。

この団体が活動を始めたのは昭和に入ってからですが、その頃になりますと、女性たちの活躍も目立ってきます。この聯盟の委員は、松宮彌平（委員長、総務部長）、林歌子（副委員長）、伊藤秀吉（事業部長）、久布白落実（財務部長）、川崎正子、高島米峰、益富政助、小崎千代子、渡瀬香芽子、千本木道子の10名でしたが、男性よりも女性の委員の方が、数が多くなっています。廃娼運動を国際化する動きの中では、女性リーダーが活躍したのです。

廓清会婦人矯風会廃娼聯盟は『廃娼資料』と題する小冊子のシリーズを刊行して、公娼制度の廃止に関する海外事情を紹介しました。デンマーク（1929年）、イギリス（1929年）、ドイツ（1929年）、フランス（1929年）、オーストリア（1929年）、ハンガリー（1929年）、チェコスロヴァキア（1929年）、日本（1929年）、フィンランド（1930年）、エストニア（1930年）、オランダ（1931年）、英領カナダ（1931年）、ノルウェー（1932年）、スウェーデン（1931年）の順に『廃娼資料』を出して、主に公娼制度やその廃止に関する法律を紹介しています。

「海外」事情紹介とは言っても、その情報は、ヨーロッパの国に集中しています。英領カナダについての情報もありますけれども、それは、日本では、イギリスが特に廃娼のモデルとして重視

されていまして、その関連で掲載されたものだと考えられます。デンマークも1906年に廃娼になって、特にコペンハーゲンの状況が注目されていました。油谷治郎七も、やはりデンマークを重視しています。このデンマークの他、北欧の4カ国は全て調査対象になっています。

この『廃娼資料』について調べている中で、調査対象とされた14の国の中に、ハンガリー、チェコスロヴァキア、エストニアなどが入っているのを、私は最初、少し意外に思いました。単に私の勉強不足かもしれませんが、現代の日本では一般に、中欧やバルト三国には馴染みが薄いように思えて、「なぜ、『廃娼資料』が発行された当時、世界中の様々な国の中から、たとえばチェコスロヴァキアが調査対象に選ばれたのだろうか？」と疑問を持ちました。そこで、私の大学院時代の先輩で、チェコスロヴァキアがご専門の橋本信子さんに、当時の同国の状況などについてお尋ねしてみましたところ、いろいろと興味深いお話を伺うことができました。この連続講座で、次回のゲスト講師の一人として橋本さんに来ていただくことになったのは、そのような経緯です。ドイツやアメリカが重視されていたのを疑問視されることはないかと思いますが、現時点で比較参照されることが少ない中欧にも、当時、注目されていた国や地域がありました。

〈性の管理〉の比較の着眼点

それらの国は、かなり大雑把ではありますが、廓清会婦人矯風会廃娼聯盟によって【図 2-26】のように把握されていました。た

だし、同じ国の中でも、時期によって状況が変わりますし、都市によって異なる法が制定されていることがあり、まさに日本も、前回、府県ごとの統計があるとご紹介しましたとおり、府県ごとに規則が定められていたわけですので、実際には、この図に当てはまらない点も、多々あります。あくまでこの図は、当時の日本の代表的な廃娼運動団体である廓清会婦人矯風会廃娼聯盟の、ある一時点における認識を表したもので、当時の実態の検証は、別に行う必要があります。

重要なことは、こうした分類が、公娼制度の維持（存娼）か廃

【図 2-26】 廓清会婦人矯風会廃娼連盟による他国の公娼制度に関する状況把握

	取締主義制度 維持	取締主義制度 廃止
性病治療の強制	日本 フランス オーストリア ドイツ ハンガリー	デンマーク エストニア チェコ・スロヴァキア ノルウェー スウェーデン
性病治療の一部強制		フィンランド
性病の任意診療		イギリス オランダ 英領カナダ

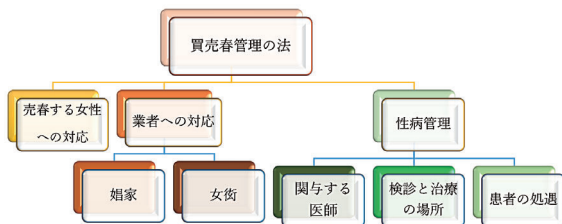
娼かという単純な2分割ではなかったという点です。取締主義であるか否かというチェックポイントとは別に、性感染症の治療にどれくらいの強制性を持たせているかということが、重要な関心事となっていました。

〈性の管理〉という点から言いますと、管理主義が最も強いのは、買売春の取締主義制度が維持され、かつ、性病治療が強制されている左上のグループです。日本は、ここに入ります。それに対し、日本の廃娼運動団体がモデルにしようと考えたイギリスは、右下の、買売春の取締主義制度を廃止し、性病が任意診療になっているグループです。この右下のグループが、最も〈性の管理〉が弱く、自由度が高いといえます。その他に、取締主義制度は廃止されていても性病治療は強制するというグループもあって、北欧の国はだいたいそのあたりに入ると考えられていました。

〈性の管理〉に関し、当時の日本の廃娼運動団体に、買売春管理の法を比較する上での着眼点とされていた項目を私なりに整理してみますと、存娼か廃娼かといった大雑把な2択ではなく、かなり細かく、30項目以上に分類されていたことがわかりました。それを大まかに示したのが【図2-27】です。買売春の取り締まりと性感染症の管理の問題が分けられただけでなく、買売春の取り締まりを行う際に、売春する女性に対する対応と業者への対応をはっきり分けていて、さらに、業者についても、娼家と女衞を分けています。

売春をする女性についての項目では、客が誰であるかによって処罰の仕方が違う場合があり、客引きを認めている場合にも、そ

【図 2-27】 1930 年前後の日本における買売春管理の法についての廃娼団体の認識



の許可する場所にどんな制限を設けるかといった点に、国ごとの特徴が出ました。たとえば、チェコスロヴァキアでは、隣人や少年を相手にした場合には禁錮刑にするといった決まりがあったようです。また、取締主義制度を廃止しているグループに分類されているオランダでも、アムステルダムでは、カフェや酒を出す店での客引きを禁止するルールが定められていたことが紹介されています。

業者に関しては、特に、女街に関するルールがヨーロッパでは詳細に定められており、それが日本で紹介されました。たとえば、自由度の高いイギリスでも、13歳以下の少女を勧誘した場合には重罪となって終身刑の可能性もある、といった情報が伝えられました。また、外国に女性たちを連れ出すことに制限を設けているケースが紹介されました。娼婦の稼ぎで暮らす、いわゆるヒモになることを禁止するイギリスやノルウェーの法律も紹介されています。

性感染症については、日本の花柳病予防法との比較において、

詳細にヨーロッパの法が紹介されています。日本との比較において興味深いのは、たとえば、デンマークにおいては夫婦間の感染の場合も処罰されることがあったり、イギリスで虚偽の告発の刑が定められていたり、乳児への授乳の際に感染させた場合はどうなるかといった規定が、ドイツ、オーストリア、チェコスロヴァキアで定められていることなどです。ドイツでは、患者を里子に出した場合の刑も定められていることが紹介されました。

性感染症関連で、医師について定めたルールとして、日本ではめったに論じられることのなかった患者の権利についての規定が、いろいろと紹介されています。たとえば検診の際に、イギリスでは女医を希望することが可能であったり、フィンランドでは、検診の方法に制限が設けられたりしていることが紹介されました。検診や治療についても、義務という観点からではなく、たとえばスウェーデンのストックホルムでは、無料の診療を受けることが患者の権利として認められていることが紹介されており、そのような情報は、日本における性感染症の捉え方そのものを変え力を持っていたのではないかと推測されます。

これらの項目についてのヨーロッパの法のあり方が、必ずしも、すべて良いものとして日本で紹介されたわけではなく、まずは様々な管理のあり方について研究し、それらを参考に、日本でどのようなルールを制定すればいいのか、議論を進めようとしていました。

〈性の管理〉から逃れようとする人々の動き

ところで、このように日本の知的エリートたちが海外の情報を集めて、社会の改良について議論していたのとほぼ同じ時期に、日本の一般民衆の間でも、大きな変化が生じていました。それは、〈性の管理〉から逃れようとする人々の動きであったと言えます。

当時から遊廓は奴隷制的であると言われ、借金を背負った女の子たちが、苦しく悲しい思いをして、暗い表情をして働かされていたわけなのですが、日本の男性たちの中には、必ずしも倫理観からだけではなくて、自分の好みの問題としても、そのような暗い顔をした女性を金の力で無理強いして買うというような行為を好まない人が増えていったようです。娼妓を買うのではなくて、もっと自由に生き生きとしている女の子たちと関係を持ちたいと思う人が増えていったと考えられます²。

1920年代にもすでにそのような動きは見られたのですが、1930年代に入りますと、「さびれゆく花柳界」ということが新聞で報じられるようになり、欧米の文化の本格的な流入によって、遊廓に対する捉え方に大きな変化が生じていました。その頃までに、モダンガールといわれるおしゃれな洋装の女の子たちが街を闊歩するようになっていて、ダンスホールがブームになりました。それまで、男性が買春の相手を探す場は、公娼のいる遊廓の他では酌婦のいる料理店や女給のいるカフェーなどだったわけですが、それらをすべて古臭いものだと捉える人が増えていって、新しい流行としてダンサーが花形になっていきました。

ダンスホールは建物の作りも洋風ですし、流れている音楽も西

洋音楽なので、いくら遊廓がステンドグラスなどを使って西洋風の意匠を取り込んでいても、ダンスホールと比較すれば、かなり中途半端でした。1932年頃には、満州国建国にともなう「満州景気」と「ダンス熱」といわれるダンスの流行が重なって、ダンスホールだけではなく、家庭の中にもダンスの文化が入りこんでいきました。

そのような動きは、古くからの花柳界にとっては脅威でした。客をダンスホールに奪われてしまうからです。それで、花柳界では、芸妓に三味線ではなくダンスを仕込む「花柳界のダンス化計画」というものが行われたり、新しく台頭したダンスホールを押さえつけるために、ダンス排撃運動を行ったりしました。一般に娼妓や芸妓は着物を着ていますが、ダンサーは西洋風のドレスを着て、アメリカのジャズやフランスのシャンソンなどを聴いているわけですので、古い花柳界は、そのようなダンスホールの文化を、西洋かぶれで「国粹」主義に反すると攻撃しました。

1932年頃といいますと、国家が〈性の管理〉を強めて、それまであまり厳格に適用されなかった墮胎罪の規定が、実際的な力を持つようになって、本格的に産めよ増やせよの時代へと入っていった時期ですけれども、それでも、いったん管理主義に嫌気がさした人々が、遊廓を古臭いものだと捉えるようになったら、そこから先は、遊廓の内側からの弱体化が進んでいったと考えられます。

流行歌の歌詞にみる女性たちの心情

特に、若い女性たちがどのような感覚を持つかということは、決定的な重要性を持っています。前回は、「藝者商売」という明治期の歌をご紹介します。芸者商売をやめたら、両国あたりに住んで、夫は勤め人で、自分は家で針仕事をして、生まれた赤ちゃんと一緒に家族3人で川の字になって寝るような暮らしがしたい、というのが、当時の芸妓たちの憧れの未来予想図だったわけです。当時の娼妓や芸妓は、いつか年期があげたら好きな人と結婚して、一生添い遂げたいのだと、繰り返し歌っていました。それに対して、二十数年後の次の歌詞は、同じ歌の替え歌でありながら、まったく違った雰囲気歌詞に変化したものです。

レビューガールをさらりとやめて
安いサラリで堅気な勤め
遠く聴えるあのジャズバンド
知らず知らずに腰をふる³

ここでは、レビューガールをやめても、結婚するのではなくて、自分自身が堅気な勤め人になることを夢見ています。そして、職業的な踊り子として誰かのために踊るのではなくて、自分の楽しみのためにジャズにあわせて踊れる暮らしを夢見ています。この歌詞の中では、給料と言わずに「サラリ」と英語で言ったりしていますけれども、このように、〈性の管理〉からの自由を求める女性たちの動きと大衆文化の国際化は、不可分であったとわかり

ます。

つまり遊廓が、いつどのようにして終わったのか、その遊廓の終焉については、たしかにとどめを刺したのは1946年のGHQの公娼制度廃止の覚書だったと言えるのですが、そこに至るまでに、遊廓的な管理主義の制度は、国際化の流れの中で、知識人たちだけでなく一般の人々の間でも、もはや許容されえないものへと認識が変化しつつあったことがわかるのです。

4 おわりに

ここで時間が来ましたので、第2回目の本日の内容をまとめます。本日は、次のことを説明しました。

1. 海外でも、日本の買売春問題（公娼制度、海外における人身売買）には強い関心が寄せられていたこと
2. 日本人女性の写真が日本国内だけでなくヨーロッパ諸国とその植民地で絵葉書として発行され、国境を越えた郵送によって拡散され、性的に消費されていたこと。そして後に、日本人自身が、植民地化したアジアの地域の女性たちの写真を用いて、同様の行為を行ったこと
3. ゲイシャ（芸者）のイメージが、日本を代表するものと捉えられ、日本国そのものをゲイシャに擬人化して貶める動きが、主にヨーロッパで見られたこと
4. 日本の廃娼運動の中で、海外における日本の買売春問題の論

じられ方が問題視され、日本の公娼制度を欧米のそれと比較する研究が進められるようになったこと

5. 近代公娼制度の在り方が日本の廃娼運動団体によって国際比較された時、〈存娼 / 廃娼〉の二択ではなく、〈性の管理〉の在り方について、数多くの側面から検証されたこと
6. 日本の大衆文化の国際化も遊廓の衰退の要因となったこと

今回は、本日までご紹介しましたような日本の状況と関連して、他国ではどのような問題が見られたのか、ゲスト講師の3名の方々をお招きして講演していただきます。

注

- 1 こうした絵葉書の説明書きの信憑性については慎重な検証が必要だと考えられる。この「トンキンの住民」とされる「日本人女性」とメンバーのうちの数名が写った別の写真の絵葉書が、トンキンだけでなくサイゴンとハイフォンでも発行されていたことを、筆者は実物で確認した。また、日本で発行された絵葉書の写真を転用したと考えられる絵葉書がサイゴンで発行された例もある。
- 2 そうした変化の具体的事例の紹介として、拙稿『『満洲日報』にみる〈踊る女〉—満洲国建国とモダンガール—』生田美智子編『女たちの満洲—多民族空間を生きて』（大阪大学出版会、2015年）参照。
- 3 歌のタイトルは「藝者商売」から「さりとやめて」に変化している。寺敷憲編『最新流行歌』（寺敷憲、1932年）112頁。

*本研究は、JSPS 科研費 JP18K11898 の助成を受けたものです。